

保育に於ける童話の使命

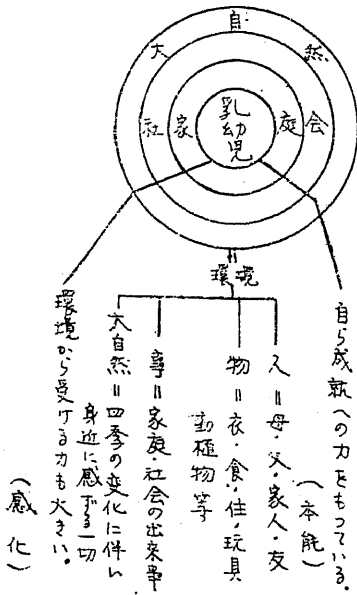
泉大津市日本乳幼児
教育研究所

砥 上 種 樹

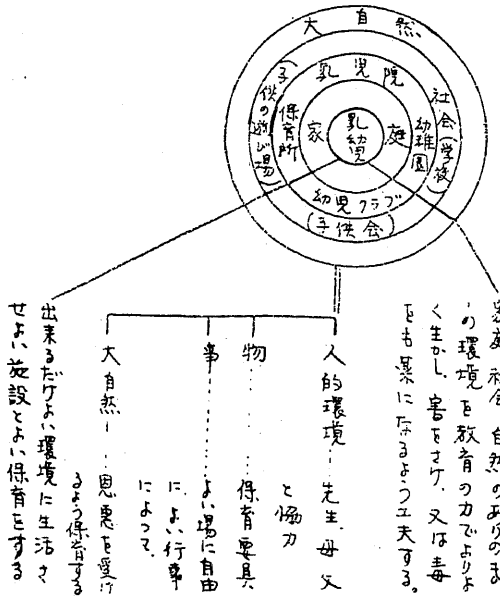
一 保 育

出来るだけよい環境に生活させ、自ら成熟する身に、学習経験をさせて主として意識下に人格の基礎を保育し、やがて学校生活に順応するよう。

(1) ありのままの乳幼児の生活の場(自然的環境)

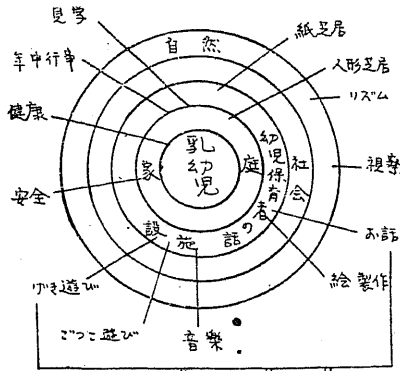


(2) あらそむい乳幼児の生活の場(教育的環境)



二 童 話

保育要項の十三、四の中にお話とある中に含まれているが、広い意味では、お話即童話、そしてすべての生活に童話心が流れていることを望む。これこそ乳幼児の心の芽をのばす唯一の貴い働きをなすからである。



三 童話の發生

(1) 乳、幼児の言葉……生れてすぐから、母の愛語をき、意識下に豊かな言葉感覚が養われ、きく能力が先行し、本能としての喚叫や破裂や喃語と結びついて言葉するようになる。物事が、身近な

ものに感与し、

○知つた言葉のくりかえしを喜び、新しい物や事にふれて知る事を欲求する。

○真実を知りたい。未知のものに驚異する。

○夢(無意識の願望や恐怖)が、きく話で共感する喜び。

(2) 幼児童話の發生……幼児と語る。

○一語童話の世界……月を眺めて、「お月さまにこにこ、こんばんわ……」子と共に語り合う時言葉は少くてもさまざまの事件をよ

びさまざま情緒が躍動する。

○愛語は童心にふれる。童心にふれ得る。母、教師は幼児の魂を純動させ、一つ心にとけ合う。

こゝに童話が構成される。

○即興童話(童話の幼虫)……物、事にふれて語る。即ち創作する力を求むる。この場合は未完成なものでよい。幼児の持つている

感覚を土台として童話の要素を取入れて楽しいお話とする。

イ、自然観察の際の話(科学的) ロ、美的情景、花や蝶等擬人化

(芸術的) ハ、善悪の人物を活躍させて情緒を洗い清めようとする

(道徳的) ニ、幼児の現実生活模写してよき躰へ(生活指導)

ホ、器楽、声楽、ギ音、ギ声を主として語る(音楽的) ヘ、絵を見せ実物を見せて話す(造型的)

四 既成童話(童話の生虫)

(1) 日本古来からの名作、(2) 世界名作、(3) 近代人の創作、(4) 指導者の創作、

この中から取材して保育カリキュラムに按配されその取扱に工夫する。レクリエーションとしてそれ以外に巧みな話者、絵、人形、幻燈芝居を与えている実情である。

五 童話の使命

◎童話する雰囲気は師弟一如の境を作り出す。そこから教育の芽はのびる◎幼児と共に合作の心意で童話の要素を折込んで話す時(話術に一大改革を求める)歡喜する◎童話の妙を得たならば命令や禁止等の対立的手段は全く不必要で自伸自展させる事が出来る◎幼児が慕いすがりつくほどの童話の魅力は話者の人格化でもある◎内面に巢ごもりする話材は永遠に行爲に作用する話材、話術、人格化の三拍子を調和させる事◎童話の変形としての絵話紙芝居、人形芝居、幻燈、活動絵話、劇遊等も幼児の才能の芽に培う貴い糧である。

六 乳幼児と童話的生活の実例

(1) 家庭では

生まれるとすぐ母の切々の愛語が、積りつもつて言葉の感覺を育てて呉れます。

これは母の本能であるから乳児が知覚しているようが居まいが超越してのものであります。それがあから子供自らの叫喚や破裂音、喃語が母の言葉の模倣に代つて行く。そして母と子の意志は通う様になります。指をみせて、「これがおとうちゃん、これがおかあちゃん……」等と話をして一語、又一語のものでありましても子供の魂

にふれるような話は童話の卵みたいなものであります。お月さまとか、はとぼつぼとか目にみるものを話材として子と共に話しする楽しい言葉は子供の心の糧であり、乳児にはおつぱいの味があるに違いありません。この家庭を唯一の環境とする乳幼児の頃、母が育ての道を探めて、少くとも童話をいたしたならどんなに子供の知能はのびることでしょう。

けれども先日或る乳児院を視察した時、満二才になつてもすべてが「うまく」位しか云えないことから見れば母の有り難さがしみじみ思われるのであります。その乳児院で婦長と話している時、婦長が「あの鳩時計のぼーぼーは一才未満の子もまねますよ」と話している時、近くにねている一才一ヶ月位の子が起上つて後の鳩時計を指さすのでした。環境に心よく音するものが記憶され、模倣されることを目の辺りにみまして音感の受与も幼きころからと感じました。そして生みの母親の如く切々の愛語を与えられない子は言葉の榮養失調であると今更のように切感されました。

2 幼稚園や保育所に於ての保育は

教育的に環境を作られていますのでこの中に生活している幼児達は、自らのびる力を發揮いたして居ります。この時、あらゆる生活の中に先生と幼児が一つ心にとけ合う唯一のものは、童話であります。

さて、此の場合の童話というのは、子供の心の実体にもふれつつ語ることであります。ですから、幼児と共に創作して行く境地であらねばなりません。即ち物や事にふれて幼児の諸感覺をよびさましてその興味の頂点まで導き出そうとする心の遊びであります。ですから

先生としては即興童話であり、童話文学から見れば未完成童話であり、保育からみればそれが本格的な童話であると言ひ得るのであります。

勿論、童話と名ずける以上は、童話の構成に必要な韻律、語の反復、事件のくりかえし、誇大、誇小、奇妙不思議、擬音、擬声等の要素や、山や谷等の話の起伏等は自ら備つて来ますが、それは無理してはいけません。即ち未完成であることが、子と共に語る童話には当然であります。これは話者即ち先生の人格から流れ出る教育技術と聴者である幼児の心の動きの如何で組み立てられた話でありますからこの記録を他に同様にまねてもまねられないのであります。

温かい愛情をたゝえた童話に巧みな人が始めて接する幼児に童話をきかせましたら忽ち百日の知己の様に否、寧ろ母にすぎるようにすがりつき親しみを持つものであります。このように、一体に心がとけ合うことの出来るものは他に類がないのであります。そしてこれがあらゆる知能を伸ばすものになりますから、保育に当る先生方は大いに研究をいたさなければなりません。童話といつても言葉だけでなく、表情、身振りが伴つております。或は、実物や標本、絵画又は人形芝居、紙芝居、幻燈芝居等として視覚を加えてより面白く与えることが併行して進んで行きます。

ここに既成童話口演の技術が求められて参ります。これも幼児、学童とその心理発達に應じて作られたもの、又は自然発生的に民族童話として存在するものがあります。これを成長発達に適應するように取材し童話しなければなりません。併も少数の幼児に話す場合は、童心にふれて共に合作する境地でありたい。勿論大勢に語

るにもその心掛は忘れてなりません。話の構成の巧みさと、話術の妙によつて幼児を没我的に聴き惚れさせる事も又望ましいことでもあります。これは子供会とか、童話会とかの催で時々やられていることであり、或はカリキュラムに配当された既成童話の取扱ひの上にも、考慮されていることでありましょう。併し何といつても話術に勝れた先生は子供の心理をつかむことがうまいと云うことが云い得るのであります。

こうした先生の下には、命令や禁止の対立的な手段をとらなくて童話的語り合ひの中に幼児をして自律的な方向へ導き得るのであります。

要するに保育生活に於て、幼児と一つ心にとけ合う唯一の要具が童話であり、その取扱ひに対する保育技術をみがくことは重要なことであります。現状は幼稚園、保育所の先生方にこれが真剣に考えられ真摯なる研究がなされているかどうか殊に教員養成機関の学校でこれが軽視されているように臆測されるのであります。